

勝海舟基金 ～令和7年度 活用報告～

あたたかいご支援をありがとうございます。

平成30年8月から募集し、令和6年度末までに累計で1,301件64,891,954円のご寄附を賜っています。ご寄附の一部を、次のとおり活用しましたので、ご報告申し上げます。

■資料の収集 海舟ゆかりの資料350点を購入しました。購入資料のうち1点をご紹介します。



元越前福井藩主の松平春嶽（慶永）が海軍大輔在職中の勝海舟に送った明治6（1873）年4月14日付の手紙です。当時春嶽は公職を辞した身であり、幕末以来の仲であった両者は共に東京にいました。

本資料で春嶽は、「昨日（13日）参内し條公（太政大臣・三条実美）にお会いした際、「勝先生が先日東京に戻られた。鹿児島事情と先生のお考えを伺うように」とのお話でしたので、ご足労ですが16日においていただきたい」と海舟の来訪を求めています。この「鹿児島事情」とは、政府への不満で国許に戻った島津久光と、久光の怒りを受けて帰郷した西郷隆盛に上京を促すため、三条の頼みで海舟が使者となり、同年3月14日から鹿児島出張していたことに関連します。任務を果たして4月11日に帰京した海舟は、すぐに三条に報告し、同16日には要望の通り東京の春嶽別邸に行き、鹿児島の内情を話しています。

西郷や板垣退助ら参議の半数が辞職することとなる明治6年の政変が発生する約半年前の出来事でした。（富井）

■資料の修復 52点の資料を修復しました。その中から1点をご紹介します。

明治8（1875）年、海舟門下で元仙台藩士の富田鐵之助が海舟に宛てた手紙です。慶応2（1866）～明治10（1877）年まで海舟の長男・小鹿がアメリカ留学をしており、富田もこれに同行していました。このため、富田の手紙には和紙ではなくパルプ紙、墨ではなくインクが用いられています。



手紙の部分画像

海外から届いた貴重な手紙ですが、用紙全体に強い折れと茶色く滲んだ文字写り、文字の抜け落ちが見られるなど、紙の腐食が進んでいました。劣化の原因は「没食子インク」という、植物のタンニン、硫酸鉄水溶液などからなるインクです。酸素と反応することで紙に焼き付き、水で消えないほどの強固な文字になる反面、紙への負荷による腐食が生じます。インク中の鉄分の酸化劣化を防ぐため、抗酸化処置と脱酸化性処置を行い、文字が抜け落ちた部分には薄い和紙で補強を行いました。

来年の展示では、このような海外から送られた手紙などを展示予定ですので、ご期待ください！

（稲垣）



これまでにご報告したものをHPで公開しております。右記コードより、「勝海舟基金活用報告」をご覧ください。

